

# 「雨ニモマケズ手帳」における仏教思想

関 戸 堯 海

はじめに

宮沢賢治没後の最初の全集発行の折りに、遺稿整理中に発見された「雨ニモマケズ手帳」は昭和六年十月月上旬から、年末かその翌年まで使用されたと考えられている黒色レザー装の小型の手帳で、賢治の病床での心の叫びが克明に記されている貴重な記録である。

近年、小倉豊文氏の『「雨ニモマケズ手帳」新考』によって全体像が明らかにされ、「雨ニモマケズ」の詩に不軽菩薩の生き方を思慕する賢治の宗教的な心情が込められていることが指摘されるなど、新しい研究成果が提示されつつある。<sup>2)</sup>

そこで本稿では小倉豊文氏の成果を基本に置きながら、賢治の信仰についてさらにアプローチするために、色々な仏教思想が混在している手帳の記述を分類整理して、死に直面していた賢治が、法華経と日蓮聖人の教えについて、いかに強い追慕の念を持って接していたかを、明らかにしたいと考えるものである。

## 一、一般的な仏教思想

「雨ニモマケズ」の詩に示される「デクノボーの精神」は、法華經の不輕菩薩の信仰体験を基盤としているが、法華經との思想的関連という面で特筆すべきは、詩の次の頁(六十頁)に日蓮聖人の本尊の形態を象徴した様式のひとつ「一塔兩尊四士」が堂々と記されている点である。妹トシの病気を契機として帰郷した賢治は、花巻で羅須地人協会を設立するが、それまでの法華經信仰は影を潜めたように考えられてきた。ところが、法華經を千部印刷して知己に配布してほしいとの賢治の遺言が明らかになったことにより、郷里での人道的な活動の奥底にある篤い信仰の存在について、にわかに注目されるようになった。

一方で一般的な仏教思想に関する記述もいくつかみられる。賢治の宗教的素養と、島地大等の講義によって法華經と出会うまでの熱心な仏教徒としての勉学の日々が、思想的に重要な影響をおよぼしていることが良く理解できる。

### (1) 参禅と山岳信仰

賢治の父、政次郎は熱心な浄土真宗の信者で、賢治も三歳のころから家人が唱える「正信偈」「白骨御文章」を暗誦したといわれ、また家庭教師の米人タッピング夫妻に聖書の講義を受けるなど、幼少のころから宗教的な雰囲気の中で育ったことが知られている。

「雨ニモマケズ手帳」の「木魚いまや、急にして」には「木魚いまや、急にして み経はも三請に入る」「さらばいざ 座を解きて跪し」(二一九～三〇頁)とあり、また「朋らいま羅漢堂にて」には「羅漢堂看經を終え 座禅儀は足の音にまじり 衆僧いま廊を伝えば あゝ聖衆来ますに似たり」(三三三頁)とあって、賢治が病床で青年時代

に報恩寺で参禅したことを回想した場面が記される。報恩寺は盛岡市北山にある禅宗の寺で、賢治は大正二年（一九一三）盛岡中学校四年生の時に寄宿舎で暴れたために追い出され、五年生のころには北山の清養院や徳玄寺にあって、報恩寺の住職尾崎文英のもとで参禅し、剃髪するほどの熱心さであった。

また「劍舞供養」（一六三―四頁）は羽黒山にまつわる山岳信仰についてのスケッチであるが、賢治が伝統的な土俗信仰や、それに関連する花巻近傍の「鹿踊り」、江刺市の「劍舞」などの伝統的な歌舞に関心を持っていたことは童話作品によっても知ることができる。さらに「池峰山、湯殿山・月山・羽黒山、巖鷲山（岩手山）」に「七庚申 五庚申 五庚申」が配されるなど（一六五―六頁）、山岳信仰と庚申信仰に関するメモも存在する。

## (2) 煩惱の克服

病床での記録らしく「生老病死」のメモには「生老病死」「愛憎離苦」などの語がみえる。これらの人間の根源的な苦悩について賢治は「抜キ得ズ」と記すが、併せて「唯苦ヲ抜クコトヲ修セヨ」「唯苦ヲ抜クノ大医王タレ」と述べ、適切な病室のあるべき姿を設計し図示している（四七―五〇頁）。仏教では名医として耆婆の名があげられるが、法華經寿量品の「良医治子の喩」によれば、良薬は法華經であり医王は釈尊であり、この点も念頭にあったと推察できる。

ここで賢治は、苦悩を克服するために自己を修すべきことを説くが、これに関連して他の頁には煩惱や六根清淨についてのメモも多い。裏扉には、散動して集中しない心の様子を示す「散乱心」や、おごりたかぶる心「貢高心」の語がみえ、それを戒める内容のメモとなっている。また「凡ソ榮誉ノアルトコロ……」には「凡ソ榮誉ノアルトコロ 必ズ苦惱ノ因アリト知レ」（六一―二頁）とあり、「わが胸のいたつき……」には「わが六根清淨なれば洗ひ

「兩ニモマケズ手帳」における仏教思想(関戸)

また病苦あるを知らず(九三頁)とあるほか、法華經安樂行品と關係する「賢聖軍 破煩惱魔 破死魔 破五蘊魔」(八三・一一五頁)のメモもあって、病床にあつても、なお自己の肉體的な愚かさをみつめて、さらなる向上を目指そうという賢治の悲壯なまでの心情がうかがえる。

(3) 諸天善神・高僧伝

「他の非を忿りて……」には「他の非を忿りて數ふるときは さながら大なる鬼神のごとく わづかに身の非を思へるときは 母そのうなるを見るにも似たり」(一三三―四頁)と「鬼神」の名がみえ、「ロマンツエロ」には「あななつかしや こは毘沙門のおん矢なれ わが身の乱をあはれみて おんかぶらやを賜ひしか」(一五―六頁)と「毘沙門」の名があり、また「月天子」(一〇五―二二頁)の詩もある。

さらに「十月廿日」には「あゝ大梵天王こよひはしたなくも こゝろみだれて あなたに訴へ奉ります あの子は三つではございますが 直立して合掌し法華の首題も唱へました 如何なる前世の非にもあれ たゞかの痛苦をば私にうつし賜はらんこと」(二四―五頁)とある。賢治の病室は二階にあつたが、その下には妹クニの夫婦が住んでいた。夫妻の子の三歳のフジが病んだ時、その泣き声に哀れ悲しみ「大梵天王」に祈つたのであろう。フジも幼くして題目を唱えたようであり、幼子の苦しみを代わつてあげたいという賢治の心が偲ばれる。

このように手帳には仏教守護の諸尊がみえるが、日蓮聖人の『日妙聖人御書』に「釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏、上行・無辺行等の大菩薩、大梵天王・帝釈・四王等、此女人をば影の身にそうがごとくまはり給ふらん」とあるように、法華經守護の善神としてのメモと考えることが妥当であろう。

さらに「伝教大師」の歌「みまなこを ひらけばひらく あめつちに その七舌の かぎを得たまふ」(二六頁)

が記される。この歌は大正十年に突然上京した賢治を心配して東京に出てきた父政次郎と、伊勢・比叡などを参拝した折りの創作であるが、『一代聖教大意』には「日本之伝教大師比叡山建立の時 根本中堂之地を引給し時 地中より舌八ある鑰を引出たりき」とあって詩との関連性がうかがわれる。

また三論教学を大成し、般若経・三論のみならず法華経・華嚴経なども講讀した「嘉祥大師吉蔵」のメモもある（二二八頁）が、質素な僧道生活を実践したことで知られ、漢詩文・和歌にも通達していた深草元政上人の『身延道の記』収録の歌を手帳に記している点が特筆できる。「何故に砕きし骨のなごりとぞ おもへば袖に玉ぞ散りける」（二三八頁）と日蓮聖人の御真骨堂にまつわる歌が記されるが、竹三本を墓標とするなど清廉な行き方を貫いた元政上人を、賢治が思慕していたことがうかがえる。

## 二、日蓮聖人の本尊

小倉豊文氏が「雨ニモマケズ」の詩について「はやくから余りに一般的に有名になりすぎたので賢治といえは雨ニモマケズというように短絡かつ誤絡されてしまい」と述べるように、詩ばかりが一人歩きしてしまい、詩の奥底に込められた賢治の宗教的心情については見過ごされてきた感がある。それをよく示すのが、詩の次の頁に記される日蓮聖人の本尊（図一）「一塔兩尊四土」（六〇頁）である。見開きの右側の頁（五九頁）は「ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハナリタイ」の詩の末文であるが、詩と本尊が同時期の記述であるかは明確ではないにせよ「雨ニモマケズ」の「デクノポー精神」が不軽菩薩の弘教精神を基調としている点からすると、全く無関係とは考えにくい。

この点で「雨ニモマケズ手帳」には(図2)のように他の頁にも曼荼羅および題目が記されている。四頁と一四九(五〇頁)では、どちらも「浄行菩薩」と「無辺行菩薩」が入れ替わり(一五〇頁には「安立行菩薩」がもう一度書かれている)、(図3)一五三〜四頁には「毘沙門天」と「持国天」が加えられており、(図4)一五五〜六頁には題目・四菩薩が列記される。地涌の菩薩は上行・無辺行・浄行・安立行の順となるのが普通だが「無辺行菩薩」と「浄行菩薩」が入れ替わっている。

南無無辺行菩薩  
南無上行菩薩  
南無多宝如来  
南無妙法蓮華經  
南無釈迦牟尼仏  
南無浄行菩薩  
南無安立行菩薩

図1

南無妙法蓮華經  
南無上行菩薩  
南無浄行菩薩  
南無無辺行菩薩  
南無安立行菩薩  
安立行

図4

南無浄行菩薩  
南無上行菩薩  
南無妙法蓮華經  
南無無辺行菩薩  
南無安立行菩薩

図2

奉安  
妙法蓮華經 全品  
立正大師滅后七百七拾年

図5

大毘沙門天王  
南無浄行菩薩  
南無上行菩薩  
南無妙法蓮華經  
南無無辺行菩薩  
南無安立行菩薩  
大持国天王

図3

さらに、七七〜八頁には「為菩提平賀ヤギ」として賢治の伯母ヤギの追善に「題目」が七篇重ねて記されており、〔図5〕一三六頁には法華経埋納の希望を記して経簡の図を記すが、これと同様な記述が一五一〜二頁にもあり、さらに一四三〜四頁には具体的に埋経すべき山の名が列記されている。このように「雨ニモマケズ手帳」の随所に題目と曼荼羅本尊が記されており、賢治の信仰がいかに篤いものであったかを知ることができる。

### 三、法華経の経文

叙上のように「雨ニモマケズ手帳」には賢治の法華経信仰が随所に吐露されている。そこで、手帳に記される法華経の経文について検討し、日蓮聖人の遺文中の引用と比較して考えてみたい。

#### (1) 序品第一

二七〜八頁にかけて法華経から短文が列記される中に、序品から「於無漏実相 心已得通達」と記される。ここで特に賢治のコメントはなく、ただ経文が八文列記されるだけである。この序品の文は日蓮聖人遺文には引用がないようであり、国柱会の『妙行正軌』などを参考としたと考えられる。

#### (2) 方便品第二

同じく二七〜八頁にかけて列記される中に方便品から「是法住法位 世間相常住」と記される。『戒体即身成仏義』に「法華の覚を得る時、我等が色心生滅の身即不生不滅なり。国土も爾のごとし。此の国土の牛馬六畜も皆仏なり。草木日月も皆聖衆なり。経に云く 是法住法位 世間相常住」とあり、日蓮聖人の開宗前の著述であることに注意を要するが、法華経の仏因仏果についての結論として、方便品にあるように人間・動物・国土・草木も即身成仏すると

「雨ニモマケズ手帳」における仏教思想(関戸)

説かれる一節である。

また手帳の「病血熱すと雖も……」(五十一頁)には「血淨く胸熱せざるの日一切を 身自ら名利を離れたりと負し 童子嬉戯の如くに思ひ 私にその念に誇り酔ふとも」とあって、方便品に「子供がたわむれに砂を集めて仏塔を造り、草木や筆、もしくは指の爪で仏像を描くだけでも、仏道を成就していることとなる」と説かれるが、健康な日を得たのは名利を克服し、仏道成就に近づいたのであるとの賢治の自負である。「観心本尊抄」には「経に云く 若人爲仏故乃至皆已成仏道等云云。此れ人界所具の十界也」と十界互具の例証とされる。

### (3) 譬喩品第三

同じく二七〇八頁にかけて列記される中に譬喩品から「乘此宝乘 直至道場」と記される。これは「三車火宅の喩」の偈文の一節で『大白牛車書』に「法華経第二の巻に云く 此の宝乘に乗じて直に道場に至らしむと云云。日蓮は建長五年四月二十八日、初て此大白牛車の一乘法華の相伝を申し顕はせり。而るに諸宗の大師等雲霞の如くよせ来り候。中にも真言・浄土・禅宗等、蜂の如く起りせめたゝかふ。日蓮大白牛車の牛の角最第一也と申してたたかふ。両の角は本迹二門の如く、二乗作仏・久遠実成是也」とあり、日蓮聖人は立教開宗を「大白牛車の一乘法華の相伝を申し顕はせり」と称して二乗作仏・久遠実成を論拠に法華最勝の論陣を張ってきたと述べている。

### (4) 法師品第十

手帳の二七〇八頁にかけて法華経文が列記される中に、法師品の法華経受持の功德について説かれる部分から「当知如是人 自在処欲生」と記される。近い部分の引用が『得受職人功德法門抄』にあるが、この経文と同じ引用はないようである。



また二二八頁には「難信難解 科学ヲ習ヘル青年ノ」とあって、科学を勉強している青年が仏教信仰に入ること、なかなか難しいものであると、病床でしみじみメモしたものと考えられている。『報恩抄』に「此経に指ところ了義経と申すは法華経、不了義経と申すは華嚴経・大日経・涅槃経の已今当の一切経なり」<sup>15</sup>とあるように、法華最勝の重要な論拠として遺文中にしばしば引用される。

(5) 提婆達多品第十二

手帳の二七〇八頁にかけて法華経文が列記される中に、提婆達多品から「於忽然之間 变成男子」<sup>16</sup>と記される。この経文は法華経の重要な特色である「女人成仏」について説かれる一節であるが、『観心本尊抄』に「経に云く 龍女乃至成等正覚等」云云。此れ畜生界所具の十界也」<sup>17</sup>と畜生界に十界を具する論拠とするなど、法華経の救済の普遍性を示す思想として遺文にしばしば引用される。

(6) 勸持品第十三

同じく法華経文が列記される中に、勸持品の二十行の偈から「我不愛身命 但惜無上道」<sup>18</sup>と記される。勸持品の二十行の偈は、八十万億那由他の菩薩が仏滅後の悪世における値難忍受の法華経弘通を誓った文で、『南条兵衛七郎殿御書』に「日本国に法華経よみ学する人これ多し。人のめ(妻)をねらひ、ぬすみ等にて打はらるゝ人は多けれども、法華経の故にあやまたるゝ人は一人もなし。されば日本国の持経者はいまだ経文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ。我不愛身命 但惜無上道是也。されば日蓮は日本第一の法華経の行者也」<sup>19</sup>とあるように、日蓮聖人が法華経弘通と受難の覚悟を決定した文として重要視されるものである。

手帳の「快樂もほしからず」(二七〇四頁)には「快樂もほしからず 名もほしからず いまはたゞ下賤の癡軀

を法華經に捧げ奉りて……」とあり、また「疾すでに治するに近し」(四一―六頁)に「敵に日課を定め 法を先とし」というような、法華經を先とし身を捧げるという考え方は、まさに日蓮聖人の死身弘法の精神を彷彿とさせる。さらに「わが胸のいたつき……」(八七―一〇四頁)にも「護法の故に一身を焼かれんに そのこと何の幸ぞ」とあり、薬王菩薩の焼身供養も想起されるが、勸持品の護法の精神を下敷きとしていると考えられる。

(7) 安楽行品第十四

手帳の八三―八六頁には「賢聖軍 破煩惱魔 破五蘊魔 破死魔 凡愚者 常転展 在諸魔手中 病 去恐怖時 半癡 離憂愁時 全治」と記されるが、これは安楽行品の「賢聖の軍の五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戦うに大功勳有つて、三毒を滅し三界を出で、魔網を破するを見ては」の經文に基づくと考えられる。『一代聖教大意』では煩惱を断じた「賢」「聖」について論じられるのみで、「賢聖軍」については言及されないが、この經文のすぐ後にある「一切世間 多怨難信」については、滅後の布教がいかに困難かを示す文として遺文に頻繁に引用されている。

(8) 從地涌出品第十五

手帳の二七―八頁にかけて法華經文が列記される中に從地涌出品から「昼夜常精進 以求仏道故」と記される。釈尊が「地涌の菩薩たちは仏道を求めんがために、昼夜につねに努力をかさねている」と弥勒菩薩に説明している部分であり、賢治の求道の精神にふさわしい印象的な一節であるが、遺文中の引用については不明である。

(9) 如来寿量品第十六

日蓮聖人は如来寿量品において、釈尊の永遠性(久遠実成)が明らかになったことにより、釈尊滅後のはるか時を隔てた末法の凡夫も成仏できるとみて、寿量品を特に重要視していたことは周知の事実である。

手帳の表紙の端の鉛筆さしに差し込んであった小さな紙片に記されていた「塵点の劫をし過ぎて……」の短歌には「塵点の劫をし過ぎて いましこの 妙のみ法に あひまつりしを」とあって、はるかな時空のはてに、釈尊の真実である法華経に出会うことのできた喜びが率直に詠じられている。また「わが胸のいたつき……」（八七〜一〇四頁）にも「わが身熱し燃えたれば こゝろたゞ久遠の如来をおもひ わが両掌やゝに合し 唇や息これに契ひたれどもかなしいかな前障いまだ去らざれば また清浄の光明なく 人を癒やさすべもなし」と永遠なる釈尊を心に念じながらも、自身の力がおよばないことを嘆いている。

なお「木魚いまやゝ急にして」（二一九〜三〇頁）には「しめやかに木魚とゞろき いま誦し出づる寿量品第十六や……」と報恩寺での参禅と読経の情景が記される。

#### ⑩不輕菩薩品第二十

『転重經受法門』に「法華経は紙付に音をあげてよめども（中略）過去の不輕菩薩・覺徳比丘などこそ、身にあたりてよみまいらせて候けるとみへはんべれ。現在には正像三千年はさてをきぬ。末法に入ては此日本国には当時は日蓮一人みへ候か」とあるように不輕菩薩は増上慢の比丘からの迫害に屈することなく法華経を弘経したが、そこに日蓮聖人は法華経の行者の在るべき姿勢を見出している。そして賢治も「雨ニモマケズ」の詩の「デクノボー精神」に象徴されるように、不輕菩薩の但行礼拝の実践に思慕の念を懐いていたと考えられる。そして手帳の「山上の堂のくらやみ」（二一九〜二四頁）には「あるひは互石さてはまた 刀杖をもつて追れども 見よその四衆に具われる 仏性なべて拜をなす 不輕菩薩 菩薩四の衆を礼すれば 衆はいかりて罵るや この無智の比丘いづちより 来りて われを礼するや 我にもあらず衆ならず 法界にこそ立ちまして たゞ法界ぞ法界を 礼すと拜をなし給ふ」と不輕

菩薩がひたすら四衆の仏性を礼拝した姿を讃仰する。また「土偶坊」(デクノボウと読むか)と題された、病床で劇の構想をしたと思われるメモもある(七一〜四頁)が、そこには「ワレワレ カウイウ モノニナリタイ」「土偶ノ坊石ヲ投ゲラレテ遁ゲル」などと記され、不軽菩薩の実践行と深く関わる記述であることがわかる。

(1) 如来神力品第二十一

手帳の一・三頁には、法華経を誦誦すれば、それがいかなる場所であっても諸仏が悟りを得る尊い道場となると説く如来神力品の「当知是処 即是道場 諸仏於此 得三菩提……」<sup>21</sup>という経文が記され、「調息秘術」(八一〜二頁)には如来神力品の経文に合わせた呼吸法が記される。賢治は法華経の祈りに自己の呼吸を託したのである。『守護国家論』等に引用があるが<sup>22</sup>、「調息」については言及されないようである。

(2) 観世音菩薩普門品第二十五

手帳の「怨敵悉退散」(三三〜八頁)には「われに衆怨ごとくくなきとき これを怨敵悉退散といふ」<sup>23</sup>とあるが、観音の力を念ずれば災難はすべて消え失せることを説く観世音菩薩普門品の一節についての記述である。遺文には直接この部分の引用はないようであるが、観音偈については『撰時抄』などに散見される。賢治は観音を念じて病床の痛苦に耐え、深く反省して自分に「衆怨」のないことを見極めたのであろうか。

(3) 普賢菩薩勸発品第二十八

手帳の二七〜八頁にかけて法華経文が列記される中に、法華経を受持し誦誦する者の功德を説いた普賢菩薩勸発品の「是人命終 為千仏授手 令不恐怖 不墮惡趣」という経文が記されるが<sup>24</sup>、遺文の用例は『生死一大事血脉抄』だけのようである<sup>25</sup>。

## おわりに

「雨ニモマケズ手帳」には法華經と日蓮聖人に対する賢治の篤い信仰と思慕が明確に示されている。曼荼羅本尊の記述がみられることと、随所に法華經の教義が折り込まれているのがその例証である。賢治は国柱会から授与された「佐渡始頭の十界曼荼羅」を病中でも枕上の書架の中央上段に奉安して禮拜していたといわれるが、手帳に記される法華經の經文と、それらが引用される日蓮聖人遺文を検討したところ、必ずしも真蹟現存・曾存の遺文ばかりではないことが指摘できる。この点で賢治が愛用した『日蓮聖人御遺文』（靈良閣版）および国柱会の『妙行正軌』、田中智学『本化撰折論』などの国柱会の教義および依用する遺文、さらには賢治の法華入信の頃の「撰折御文・僧俗御判」などとの関連について考察する必要があると生じてくる。

また手帳の二三五頁にも「高知尾師ノ奨メニヨリ 1、法華文学ノ創作 名ヲアラハサズ 報ヲウケズ 貢高ノ心ヲ離レ」とあるが、賢治の法華經信仰については「法華文学」と称される文学作品全般について精査していくことが重要である。今後の課題として、さらに検討を重ねたい。

## 註

※ 「雨ニモマケズ手帳」にみられる詩・メモ等については「校本 宮沢賢治全集」（筑摩書房・昭和五十年十二月二十日発行）第二卷（上）に拠り、その都度（〇〇頁）と手帳の頁数を表記した。

（1） 小倉豊文『「雨ニモマケズ手帳」新考』（東京創元社・昭和五十三年十二月五日発行）分銅惇作『宮沢賢治の文学と法華經』（水書房・昭和五十六年七月十五日発行）等を参照。

「雨ニモマケズ手帳」における仏教思想（関戸）

「兩ニモマケズ手帳」における仏教思想(関戸)

(2) 『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下「定遺」と略称)六四七頁・真蹟断簡。

(3) 『定遺』七二頁・日写本。

(4) 小倉聖文前掲書一四七頁参照。

(5) 『真訓函疏 妙法蓮華經開結』(以下「開結」と略称。平楽寺書店・昭和三十七年四月八日発行)上段の八一頁。

(6) 遺文中の法華經引用については、浅井田道『法華品類日蓮遺文抄』(山喜房佛書林・昭和六十三年十月十五日発行)を参照。

(7) 『開結』一一五頁。

(8) 『定遺』一四頁。

(9) 『開結』一一二頁。

(10) 『定遺』七〇四頁・真蹟現存。

(11) 『開結』一六四頁。

(12) 『定遺』一四一―二頁。

(13) 『開結』三二〇頁。なお法華經原典では「処」を「所」とする。

(14) 『定遺』六二八・六三〇頁。

(15) 『定遺』一一九四頁・真蹟會存。

(16) 『開結』三五四頁。なお法華經原典では「於」の字がない。

(17) 『定遺』七〇四頁・真蹟現存。

(18) 『開結』三六四頁。

(19) 『定遺』三三七頁・真蹟断簡。

(20) 『開結』三八五頁。

(21) 『定遺』五八―六〇頁・日写本。

(22) 『開結』四〇七頁。

(23) 『定遺』五〇八頁・真蹟現存。

- (24) 『開結』五〇三頁。
- (25) 渡辺宝陽「生と死のはざままで」(日蓮宗新聞社刊『正法』四三号・昭和六十三年七月一日発行) 参照。
- (26) 『定遺』九五〜六・二二九頁・真蹟會存。
- (27) 『開結』五六二頁。
- (28) 『開結』五九四頁。
- (29) 『定遺』五二二・三頁。なお本書には偽撰論が提示されている。